笑う男

若狭陽太

男は人を笑わせる才があったので
いつも下らない冗談を言って　みんなそれを聞いて腹を抱えて笑った
彼は人を笑わせているとき　自分が世界でいちばん幸福に思えた
笑った以上は　誰も彼に踏み込むことはできない
男は高い塀の上　深い堀のほとり　厚い装甲の向こうで　防衛戦をすることにした
男は全ての人を笑わせたかった
男は気付いていた　笑わせたいなら　相手と同じ景色を見なければ
男は学んだ　働いた　飲んだ　転んだ　見た　聞いた　味わった
みんなは笑った　日常を忘れた　頬は弛緩した　硬直した　腰は砕けた
彼の目の前で笑う人々の　脳の奥が弾ける様子は彼を虜にした
彼は絶えず分かち合い　線を引き　同じだけ腹を抱えて
誰の訪問も受けない不落の城の上
誰も触れない深海の骨の下で
彼は笑っていない時間の過ごし方を忘れていた
彼はふと　面白さについて考えを巡らせた
相手が知っていることを　相手が結びつけられなかった事物から結びつけとき　ひとは笑うのだと考えていた
だが　もしも　自らを曝け出すことが一番面白いのだとしたら
人が戸棚に閉まって開示しないことを　世界と結びつけられたら　きっと面白いに違いない
そう思って　裸で芸をすることにした
人は日常を掻き乱される緊張感と　知っているものが結びつく安堵の虜になった

彼は城を開場し　堀の水を抜き　装甲を外して裸になった
もっと自分の中を見せたい
もっと事物を繋げたい
自分の中に近づけば近づくほど面白いと思った
包丁を手にして　腹を捌き溢れる腸を見せた
まろび出た中身をひとしきり抑え　自らの手を見た
真っ赤に染まったそれを見て　「なんじゃこりゃあ」と言った
気づくのが遅いよ、と誰かが言った